

横笛普及プロジェクトについての案

2009/01/22

● 時代背景からみた民俗文化財の現状

明治維新・戦後と大きな変革の中、日本全国の郷土芸能は欧米諸国より劣る文化として見なされ、衰退の一途をたどった。そこで政府は 1975 年の文化財保護法の改正によって重要無形民俗文化財の制度をつくり、2008 年 3 月現在で、合計 257 件が指定されている。

が、しかし文化財保護法自体が、ある過去の形の保存を前提とした体系となっているために、**創作や変更を許さないのが現状である**。これでは**常に創造的に変化している民俗文化には対応できない**。むしろ、ある形を固定してしまうことで、その**活性化を阻害することすらある**という点である。

これは法自体が『創造性』ということを想定しておらず、あくまで『保存』のための制度であることからの限界である。

また、民俗文化については、無形文化財のような伝承者の養成や芸そのものの自体の公開に対する支援についての項目が無く、また、「国民の生活の推移の理解のため」に保存の対象とするといったように、創造的な文化活動としてとらえていないなどの仕組みとしての大きな問題を抱えている。

上記からの結論として、

重要無形民俗文化財の制度が出来てから風俗慣習、民俗芸能、民俗技術などの民俗文化財の衰退が始まったといっても過言ではない。

● 衰退した津軽の年中行事の一例として・お山参詣

その影響を受けた津軽の民俗文化財の一つとして「岩木山の登拝行事・お山参詣」が挙げられる。(1984 年 1 月 21 日 津軽地方各地 お山参詣保存会)文化財指定を受け、一時は盛り上がったものの、近年は縮小の一途をたどっている。

その原因は前述した赤字の部分であると思えて仕方が無い。

本来民俗芸能はその時代時代に見合った流行を取り入れ、

1. みんなが興味をもって参加し、
2. みんなで楽しみながら
3. みんながその時間を共有する

ものであるべきだが、現在は**先人(登山囃子大会の歴代優勝者のみ)を神格化**するあまり、一部の人間にしか受け入れられない状況にある。

- 子供達に囃子を教え「**後継者育成**」をするという目標が登山囃子保存会にはあるものの、思春期を迎えると、恥ずかしい、やっけていても仕方が無いという思いでほとんどの子供達がやめていく。

- 登山囃子保存会は、お山参詣保存会の傘下であるが、現在、本部であるお山参詣保存会の役員は1名を除いて全て登山囃子保存会役員である。しかも、その中枢は登山囃子の歴代優勝者で占めるため、行事としてこれからどうして行くか？ではなく、その年の登山囃子大会の優勝の行方に大方の興味がある。したがって行事の縮小などにはあまり関心が無く、「行事の中にある囃子」ではなく、「囃子の為の行事」になってしまっている。その代償として、

登拝団体の減少（ねぶた団体はふえているにもかかわらず）

踊り手の減少（よさこい団体は増えているにもかかわらず若者が踊りに来ない）

出店の減少（参拝者の減少に伴うもの？取締りの強化？）

囃子手の減少（登拝団体減少に伴い気軽に覚えることが出来ない環境）

参拝者の減少（岩木山信仰の薄れ・地域文化に対する誇りの薄れ）

朔日山登拝者の減少（と同じ）

お山参詣という行事自体を知らない人の増加

津軽の文化としてのPRに対する嫌悪感（広めようとしな）

昔の囃子に無関心（大会で演奏される物だけに興味がある）

登山囃子保存会・会員の多くが行事に対する入会ではなく、大会出場をするために入会している。

大会に出ない登山囃子愛好者に対して行う勧誘活動が無策

という、多岐にわたる問題が見られる。

がしかし、それについて対策を立てようという動きは現在のところまったく無いし、立案しても興味さえ示さない保存会役員までいる。

これを打破するには、地元就職し、地元で生きていこうとする若者達に「素晴らしい誇りある文化だ」と伝え、伝承していくアイデアをみんなで出し合い、遂行していくことが大切だと思うが、この作業をないがしろにしているのが現状である。しかし、衰退の一途をたどっているお山参詣ではあるが、もともと**魅力溢れた行事**として「行事を知っている」人の評価は高く、

毎年この行事を見に来ている県外の熱心なファンもいる

北海道の斜里にも登山囃子研究会があるなど県外の愛好者もいる

多くのプロの横笛奏者がこの囃子を舞台上で演奏する

佐渡の和太鼓集団「鼓童」がパフォーマンスで行っている担ぎ太鼓のルーツが登山囃子

など津軽の文化を認めている人達もいる。特に笛文化は特筆すべきところである。お山参詣は、囃子・笛文化が先に進み、その部分の権力誇示が横行した分、バランスが崩れ、盛り上がり欠ける行事になったのではないかと私は考えるが、そこを逆手に取り、津軽地域全体に横のつながりのある登山囃子の囃子手達が、良識ある見地から主導的な立場をとり、そこを活用した啓蒙活動等の展開をすることにより、民俗文化・地域文化を地元民が見直し、地域活性化・民俗芸能復興に繋がるのではないかと考えられる。

● 横笛普及プロジェクトがやっていきたいこと

あくまで、補助的な立場をとる。目的は伝承者を増やすためのきっかけ作りが目的で、伝承は各保存会のすべきことであり、その部分は固く守らないと反発が大きくなると思う

津軽の囃子文化の伝承の補助

- ◇ 今まで興味の無かった人達に、ねぶただけではない囃子（登山囃子・神楽・獅子踊り・権現舞・荒駒・他地域のねぶた囃子等）を聞いてもらう機会を作り、やってみたい人を増やす、そして各団体に紹介する
- ◇ 各地域で消えていきそうな囃子の復活の協力（各地域が主導の下で）
- ◇ 郷土芸能をより多くの人に見てもらうためのアイディアの創出・実行

若者達（20～30代）へのPR

- ◇ 郷土芸能＝老人クラブの図式の打破
- ◇ 年配者に配慮しながらも若い人が楽しめる環境づくり
- ◇ 保守的過ぎる現状の打破
- ◇ 若者がどうすればこの文化に興味を持ってくれるのかの調査

祭り好き以外の人へのアプローチ

- ◇ 津軽の囃子（特に笛）のレベルの高さを祭り以外で見る機会を作り、祭りとしてだけではなく、一つの習い事の選択肢に入るような動き
- ◇ コアな囃子手だけではなく、気軽に愛好できる環境づくりの補助

津軽の囃子文化をひろく広める

- ◇ 県外の津軽の囃子愛好者を広める活動
- ◇ 62年も続く登山囃子大会を活用した全国的な囃子（特に笛）の聖地化（保守的な登山囃子保存会との連携が必要で、かなりの案が必要）
- ◇ 県外への演奏機会をつくる。郷土芸能はその団体で、それから一歩進んだ前衛的な分野に関してはこちらで

自分達のレベルUPに繋がる活動・自分達が自信を持つための活動

- ◇ 県外の横笛奏者の鑑賞会の実施（そのときに必ず郷土の囃子を演奏することで啓蒙活動に繋がる）をすることで、いろいろな地域の横笛を聞くことが出来る機会を作り、客観的な見地から自分達の囃子の評価をする機会を作る。
- ◇ 将来的には津軽の囃子の発表会をやれば・・・

以上の事柄をやった上で（もっとあるかもしれないが・・・）囃子手が増加した時に囃子の技術だけではなく、各団体が行事そのものを大切にする組織作りが出来ていればいい方向に行くと思う。そのためには、このプロジェクトが芯の通った活動を積極的に行い、それに共鳴した人々（特に若い力）と現在の保守的な環境を変えていかなければいけない。

また、お囃子マニアのための祭り・行事ではなく、もっと津軽人が気軽に参加できるものになっていかないといけない